

子どもが主体の行事とは…

土曜日の「わくわくフェスティバル」まであと2日。社協3園は、ひとりひとりの主体的な遊びや発達や興味、関心に合わせた教育保育を実践してきました。その中で行事がどうしても足枷になりがちでした。「子ども達の日常の遊びを行事によって、中断しないといけないのか?」「日々の遊びや活動を邪魔しない行事のあり方は?」について、ここ数年模索してきました。現在、年間を通して運動会に特化した練習や活動はほとんど行っていません。(プログラムと時間の都合上リハーサルは行います)

庭での身体を使った遊びは、ひとりひとりの関心度や達成時期が違います。以前の私達は、「指導」の下に一斉的な運動技術の習得をさせていました。毎日それを繰り返させていたら5歳児(すみれ組)のほとんどの子ども達が、跳び箱飛びや鉄棒の逆上がりなどが出来るようになるでしょう。しかし、そのような教育保育は「遊び」からは程遠く、担任は、種目の見栄えや保護者受けを気にして「練習」がきつくなり、子ども達も保育者も互いに疲弊します。「指導」が極端になると子どもはその重圧をもちに受けることになります。登園を渋る子どもがいたことは事実です。

実際そのような保育を行ってきたから分かります。その深い反省から毎日の遊びを壊さない行事の取り組みを行ってきました。ひとりひとりの関心や挑戦する時期、そして達成する時期は違って当たり前です。わくわくフェスティバルで、5歳児すみれ組さんは、独技を行います。独技の内容はそれぞれ違います。谷頭こども園の庭で毎日遊んだ子ども達の軌跡をご覧ください。そしてこの挑戦は、卒園するまで続き小学校入学へと繋がっていきます。

凸凹の庭が育む「自分の力」

先日、築山の修復が終わりました。今は、地ならし中ですが、来週の半ばごろから使えるようになります。

以前の築山は、傾斜が緩く上がると平らになっていたため簡単に登れ、上では走り回ることができていました。今回は傾斜をきつくし3歳児でもかなりの体力を使う形状にしました。これは、「誰もが簡単に上れる遊具は危険!」の考えに沿ったものです。社協3園は、庭の遊具や環境に関しては「野育の会」に学んでいます。実践している全国の園を見学にも行きました。また、「生きる力」の根本を育てる環境は、自然にあることを実践している「広島大学附属幼稚園」にも赴き、その学びを園庭づくりに活かしています。

2歳児や3歳児が上れるように、木の幹に梯子を掛けたり、ボルタリングに踏み台を置いたらどうなるでしょう? 例え上れたとしても、バランスを保ったり、自力で降ることはできないでしょう。そこにケガや事故が起こります。**上れるようになる力は、子ども達自身でつけるのです。**道具や大人の助けを借りずに自分の力と自分の術だけで上がった子どもは、身体のバランスを保つことができます。降りる時も考えながら降りる技と力がついていきます。

当園では鉄棒も雲梯もはんと棒などの遊具は、大人は手を貸しません。自分で試行錯誤してのろうとすることを認め見守ります。一般的に1.2歳児なら大人が手を貸して、ブランコに座らせようとします。優しく揺らしてあげたら座っておくことができます。しかし、バランス良く座ったり降りたりはできません「自分でおしりを台にのせ、持ち手を握って座わりバランスを保ちひとりで降りる」ことがブランコにのれると言う解釈です。大人の助けでのった子どもは、手を離したり、後ろに転倒したりします。**自分ひとりの力で乗れることは、そこまでの発達や身体的な能力がついている証拠です。**

私達はこれからも決して急がせず、子ども達のそれぞれの関心や挑戦したい時期に合わせていきます。その為に、凸凹の庭が必要です。0歳から凸凹の庭で遊ぶことは自然と足腰を強くし体幹が育ちます。

また、来年度は庭の南東にある銀杏の木に、地上2mの高さのツリーハウスの建設を予定しています。2mの幹回りを子どもの手と足で這い上がるのは、至難の技でしょう。自力で上れる仕掛けを思案中です。自分の力だけで挑戦することは、成功体験を重ね、自尊感情を高めることが期待できます。

お父さんのお迎え

谷頭こども園に来て半年。子ども達の送り迎えに、お父さんが多いのに驚いています。「男女参画社会」や「ジェンダーレス」の言葉から程遠いくらいの育児へのお父さんの参加に感謝です。お父さんがタブレットを押して、子どもさんの荷物をまとめて、抱っこしてあるいは手を引いて帰られる後姿は、本当に尊いものがあります。うちも父親の送り迎えがほとんどでした。子どもが小さかったときの育児の大変さを思い返しなが、園のお父さん方の後姿に「あー今日も無事に1日終わったな…」と安堵する毎日です。